

黒石温泉郷における観光地理学的考察

藤田正吉

1. はじめに

温泉地の多くはその発生的な地方湯治場から観光温泉地へと発展する傾向にある。そこで本稿では黒石温泉郷を例にとり、その観光の諸分析を行ない地理的特殊性を明らかにし、そこにおける問題を提起し、その対策と将来の観光発展に関する若干の指針を主に十和田八甲田観光の結びつきを考えて試みたものである。

2. 各温泉地の立地

《位置と交通》 青荷を除く各温泉地はいずれも浅瀬石川流域に位置し、遠端の沖浦で黒石駅からバスで45分である。この流域沿いには国道102号線があり、観光のモータリゼーション化にも貢献している。

温泉郷へのバスの便は1日数回の往復便がある。冬期になると温川線1往復便のみとなる。青荷へは沖浦、二庄内から徒歩で1時間30分、自動車で30分ほどかかる。

〈第1図〉参照

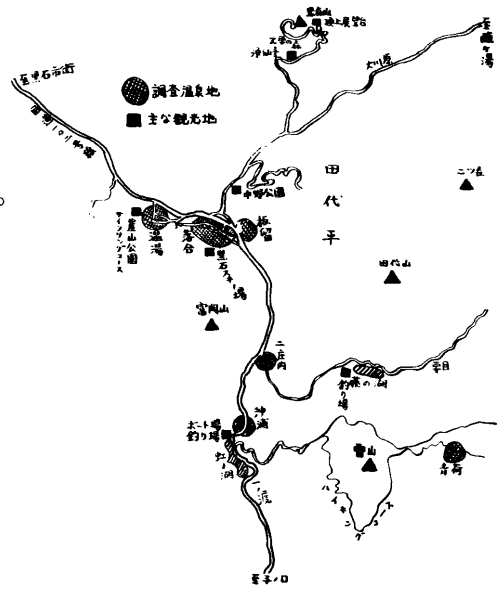
《気候的条件》 青荷を除いて各温泉地とも雪の量はかわらない。青荷は他と比べ気温も 3.4° 低く積雪量もかなり多く観光客数も皆無に等しい。

《地形的条件》 各温泉地ともに山間に位置しており空間的拡がり極めて狭少でいずれも河岸あるいは丘陵に沿って、直線的に諸施設が配置され、背後は急峻な山地断崖で地域的拡大に不利といえる。中でも落合は比較的スペースが広く今後更に水平的拡大も可能である。温泉はかなり施設が飽和状態になっており水平的拡大には困難がある。青荷は山間の溪谷にあり施設の拡張には山地の開発が要求される。

《観光資源》 浅瀬石川流域は山岳美溪谷美と自然に恵まれ、新緑、紅葉、雪景色はすばらしい景観である。またハイキングコース、サイクリングコース、スキー場、又虹の湖のポート場、釣

第1図

黒石温泉郷調査地域図



り場と近年重要な観光資源となっている。

《観光施設》 観光関係事業所と宿泊施設の規模については第1表・第2表のとおりである。温湯は客舎が殆んどから湯治場の性格が強く、二庄内は更にその性格が強く山間の湯治場となっている。

第1表 観光関係事業所数 昭和50年

	温湯	落合	板留	二庄内	沖浦	青荷
旅館	1	11	3	0	3	1
客舎	8	0	5	5	0	0
宿泊施設 その他	1	3	1	0	0	0
料理店・バー	2	2	1	0	0	0
みやげ物店	2	2	0	0	2	0
遊戯場	0	1	0	0	2	1
運動施設	0	2	1	0	0	0

第2表 宿泊施設の規模 昭和50年

収容人員(軒)	温湯	板留	落合	二庄内	沖浦	青荷
0~25人		2			1	
25~50	7	5	7	5		
50~100	3	2	4			1
100~150			2			
150~200						
200~250			1			
計(人)	475	280	854	854		70

いることがわかる。これより季節の変動が大きく経営合理化の面で大きな問題となっている。

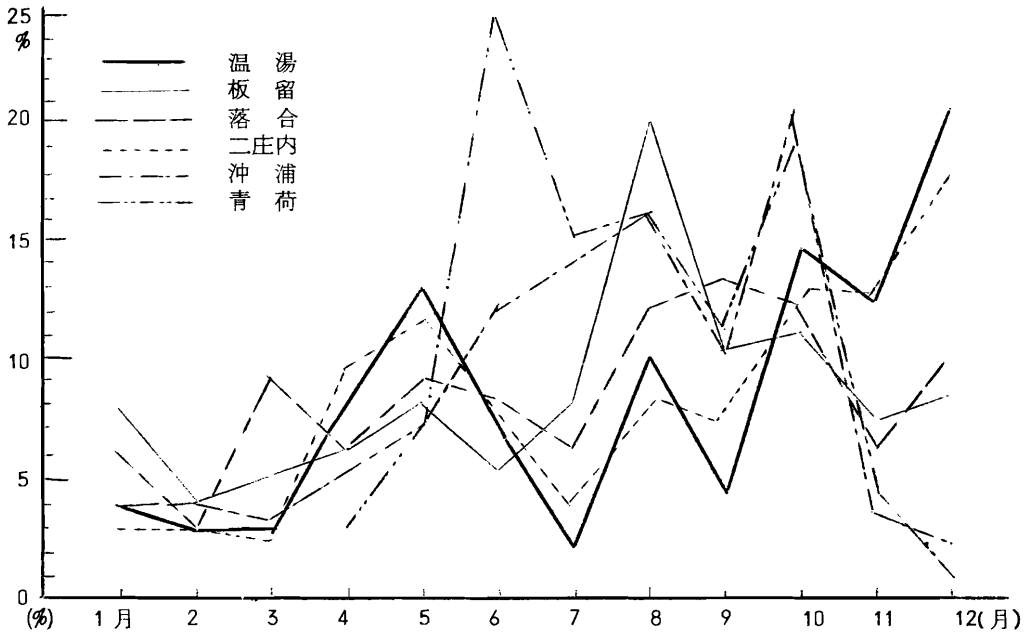
《滞在形態》 本稿では宿泊者名簿による調査から考察した。これによると温湯、二庄内は3泊以上の長期滞在型となっている。これは湯治場の性格が強いためである。板留は主として短期滞在型で温湯、二庄内に次いで3泊以上が多いのは客舎が多いからといえる。落合は他の温泉よりも遊興的施設が多いことや旅館の施設面、規模面で充実していることから家族づれや団体客の

落合は旅館の規模も大きくスキー場温泉プール、みやげ物店、料理店などが温泉と有機的に結びつき新興温泉地としての性格がうかがえる。板留は湯治の性格を残しながら行楽的面も強くなってきている。沖浦は虹の湖を中心としてポート場、釣り場、キャンプ場などがあり、その発生的湯治場から行楽の温泉地へと転化しつつある、青荷は旅館が1軒でいまだ山間湯治場といった感じであるが最近ハイキングコース、自動車道開通と行楽的面が強くなってきている。

3. 観光客の諸分析

《季節的動態》 観光客の年間の動きをとらえるのに本稿では入湯税と宿泊者名簿、観光客見込数などの資料から考察した。その結果、第2図から季節的動態をみると温湯の農閑期型、板留の夏主秋冬従の3季型、落合の夏秋主冬従の3季型、二庄内の農閑期型、沖浦の秋主夏従の2季型、青荷の夏秋主の2季型となっ

第2図 季節的動態 昭和50年



日帰り客が多く、次いで1泊～2泊と短期滞在型となっている。沖浦はダムをせき止めた虹の湖があることや周囲が新緑、紅葉時に美しい景観をよそおうため学生の遠足、町内会慰安などの団体客が十和田湖西口遊覧コースの一拠点として訪ずれ第2義的なために日帰りが多く主に短期滞在型となっている。青荷は他の温泉に比べ地形的に不利な条件にたたされているため観光客数も少なく季節的変動が大きい、この地域にはハイキングコースなどがあることから学生の遠足や植物、昆虫研究の研修団体が入りこむため主として短期滞在型となっているが、この温泉は療養の効能に特に良いので湯治を目的とした長期滞在も少なくはない。季節的にみると温湯、二庄内は、農閑期に長期滞在客が多く板留落合は夏、秋に短期滞在客が多い。沖浦青荷は夏の新緑、秋の紅葉シーズンに十和田湖と結びつき日帰り、1～2泊の短期滞在客が多くなっている。

《誘致圏》 温泉地とその利用者の地域的關係を調べる上でこの誘致圏の調査は不可決のものと思われる。本稿では黒石観光課の資料と宿泊者名簿から考察した。それによるとここ10年間(38年～48年)で県外客が2倍になり20%ほどになっている。〈第3表 参照〉主に、関東、関西、東北各県からの観光客である。県外客のほとんどは十和田湖観光のシーズンである夏、秋に集中しており県外客を80%ほど吸収している十和田観光圏との結びつきが強いといえる。温湯、二庄内は湯治客が主で、それも県内の固定客が90%ほどをしめている。板留落合は県外客が30%ほどで主に関東、関西の学生層や会社の同僚グループの人たちが十和田湖の夏の避暑、秋の紅葉時に十和田湖観光の一宿泊拠点として来遊している。落合は全体の10%

ほどが関東である。沖浦は十和田湖観光西口遊覧コースの一拠点となっているため県外客が30～40%ほどとなっている。地方別の傾向は板留、落合と似ている。青荷は国道沿いから離れているので県外客がおとずれるのはまれで90%ほどが県内客である。県外客は関東、関西の学生を中心とした若年層である。

《年令層》 如何なる世代の人々が当地区に来遊しているのかという観光客の年令層の把握は観光事業の上にも大きな問題である。

第 図で明らかなように温泉、二庄内は40代以上の中老年層が中心である。板留は各年代平均しているが客舎が多く湯治の性格ももちあわせているため老年層が若干多い。落合も平均しているが、やや中・老年層が多い。沖浦は各年代平均している。青荷は青少年層が多く、次いで老年層となっている。青少年層が多いのはハイキングコースなど遠足コースに適しているためと思われる。老年層が多いのは、この温泉が療養に特に効能が良いため湯治でやってくるお年寄りが多いためである。

4. む す び

黒石温泉郷における現況の観光分析から察すると、県外客が少なく季節の変動が大きい。又、十和田湖観光と有機的に観光ルートが形成されていないための観光の広域化にたちおくられている。この対策として宿泊施設の質の向上や十和田と八甲田と有機的に結びつけた観光ルートの形成のために現在出入率の低い黒石口のルート(第3図・第4表 参照)の他に落合温泉と酸ヶ湯を結ぶ道路を補強し舗装道路と完備し広域観光流動のサーキュレーションに組みこみ観光客が有効的に旅行できるシステムとなれば観光客の増大が県外県内を問わずできると思われる。

その他季節の変動をなくするにはシーズンオフにおける新しい魅力の創造、例えばスキー場の開発や流動性の高い自動車利用の便宜をはかる必要がある。温泉郷全体の観光発展を願う場合、落合を新観光ルート(落合 ↔ 八甲田(酸ヶ湯))の拠点として、観光のモータリーゼーション化を対象とする温泉地として開発していけば良い

第3表 観光客の誘致圏(県内・外)

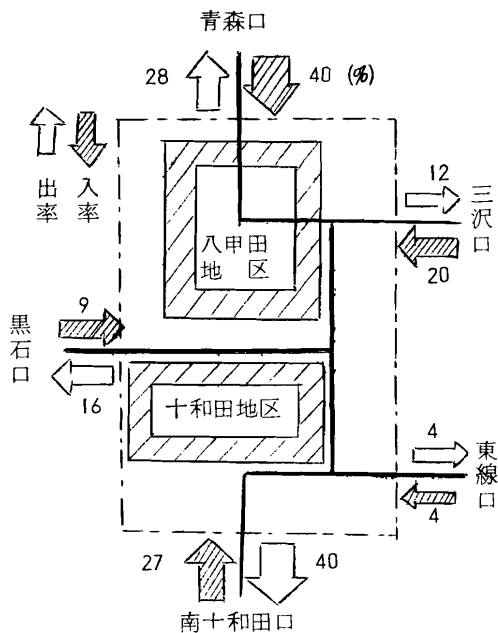
年 度	県立公園黒石温泉郷			
	計	県外	県内	
			地域内	地域外
S38	368,000(人)	9.9(%)	8.8(%)	81.3(%)
40	409,000	9.9	8.8	81.3
42	371,000	10.3	9.5	80.2
44	432,000	12.0	8.6	79.4
46	482,000	17.0	8.5	74.5
48	527,000	19.9	8.3	71.8

第4表 十和田湖観光圏口別割合

年度	合計(人)	黒石口	割合(%)
38	1,040,583	41,884	4.0
40	1,166,693	83,626	7.2
42	1,389,563	119,824	8.6
44	1,660,632	134,968	8.1
46	2,027,000	176,126	8.7
48	2,237,000	217,443	9.3

と思われる。最後にこの論文を進めるにあたって多大な御指導、助言を下された横山・水野両先生、並びに多くの宿泊施設のアンケートに協力していただいた友人諸君に深く感謝いたします。

第3図 十和田・八甲田地域の
経路別出入率 (%)



<参考文献>

- | | |
|---------------------------|--------------|
| (1) 青森県津軽観光圏観光診断報告書 (昭43) | 日本観光協会 |
| (2) 観光地理研究 (昭43) | 岩田孝三 編 |
| (3) 黒石市の統計 (第1回) (昭50) | 黒石市企画課 |
| (4) 青森県温泉の旅 (昭36) | 宮城一夫・酒井軍治郎 |
| (5) わがふるさと (昭36) | 陸奥新報社 編 |
| (6) 日曜の地学 ③ (昭50) | 青森県地学教育研究会 編 |